

浄土

monthly JODO

5

2016
May



貧乏 骨董

グラフィック・デザイナー 三宅政吉



三十数年前、私は神社やお寺、あるいは百貨店の屋上や催事場で開かれる骨董市に行くのを楽しみにしていた。そこでいろんな骨董を眺め、店主とつまらぬ話をして、少しは知見を広めることもできたが、骨董屋の親父などは、平気でいい加減なことを言う。伊万里の染付のなます皿五枚セットをしみじみと眺めていると「いい物でしょう、江戸中期の伊万里ですよ」と言い寄ってくる。親父が江戸中期と言えば相場は幕末か、明治初期に決まっている。

おもに買ったのは日常的に使う食器のたぐいである。染付や印判で白地に藍の図柄が入っているものが中心である。仏像や書画など古美術品にも興味はあるのだが、それらはあまりにも高額で手が出るはずもない。

写真はそういった骨董市巡りのさいに出会ったものである。いずれも底に Occupied Japan と印されている。第二次世界大戦後、一九四五年から五二年までの七年間に、この国の輸出品には Occupied Japan (占領下の日本) と印すことが義務付けられていた。みやげ物として売られていたものもあるだろうし、おもにアメリカへの輸出品として作られた、瀬戸物のテーブルに置く胡椒や塩の容器である。いずれも高さは四センチから五センチ、粗末といえは粗末なものである。底にはコルクの栓がある。

ひと目でその愛らしさのとりこになった私は、骨董市に行くたびに探し求め、十数個ほど手に入れた。値段は一体二百円から三百円ほどだったろうか。上の三人の水兵は、木製の黒いペンチに置かれていたが、不安定ですぐに落ちるので、傷つかないように本棚に強力な接着剤で固定し、取れなくなってしまう。

わずか七十年に満たない歴史しかないものを、骨董と呼ぶわけにはいかないだろうが、私にはとても大切なものだった。今はもう手元にはないが、せめて数体写真に納めていてよかった。

少し前、新井薬師の骨董市で Occupied Japan の印された人形を見つけた。値段は一体三千円から四千元を超えるものもあった。いつのまにかコレクターズアイテムとして値上がりしたようだ。

浄土

2016/5月号 目次

連載 法然上人のお言葉②②	梶村 昇	英訳 河西良治	2
今昔物語と法然上人		阿満利磨	4
連載 響流十方		袖山榮輝	12
連載 江戸の川を歩く③		森 清鑑	16
連載小説 渡辺海旭⑥⑧		前田和男	20
連載 誌上句会		選者＝増田河郎子	28
連載 マンガ さっちゃんはネッ		かまちよしろう	31
編集後記			32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に。

（『選択本願念仏集』）

現代語訳——一心にひたすら阿弥陀仏の名を念じて、いつでも、どこでも、時間の長短を問わず、一念一念に思いをこめて申すのを、浄土に往生する正しく定められた行と名づける。これは阿弥陀仏の本願に適っているからである。

Honen Shonin's Sayings

It shall be called "shojo no go", a proper practice decided on for the attainment of the birth into the Pure Land, for people to call upon Amida Buddha by invoking his name earnestly and incessantly with the whole heart at any time and place, regardless of whether it is done for a long time or not. It is because this practice is consistent with what Amida Buddha originally vowed. (*Senchaku hongan nembutsu shu*)

解説

これは上人の名著『選択本願念仏集』に述べられた言葉で、法然仏教の基本となるものです。法然仏教は長い日本の仏教史を前に二分したといわれます。それまでの日本仏教が、現実を遊離した観念教学の展開でしたが、それを地に足をつけた実現可能な仏教にしたということです。しかもそれは独断ではなく、伝統の仏教教学に則ったもので、『選択本願念仏集』はそれを示したものです。

Commentary

This was stated in Honen's main literary work *Senchaku hongan nembutsu shu* and became the very essence of his Buddhism. His Buddhism is said to have divided a long history of Japanese Buddhism into the two periods before and after it. Till then Japanese Buddhism had developed into idealistic doctrines divorced from real life. Honen admittedly changed it to practicable learning in touch with reality. However, this change was not his own discretion but was conformable to traditional Buddhist learning, which was demonstrated in *Senchaku hongan nembutsu shu*.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

今昔物語 と 法然上人



阿満利磨

明治学院大学名誉教授
「連続無窮の会」同人

なぜ、『今昔物語』を、法然上人との関係でとりあげようとするのか。それはほかでもない、『今昔物語』の成立した時期が法然上人の活動と重なるからだ。つまり、法然上人の革命的な仏教の成立は、『今昔物語』の撰者に見られる人間観や仏教に対する期待と、根を一つにしているように思われるからなのである。もし、そうした推測が許されるならば、法然上人の専修念仏誕生のきっかけが一段と理解しやすくなり、また専修念仏の意義もはつきりするのではなからうか。

研究者によると、『今昔物語』は千を超える説話から構成されているが、撰者の名前はもとより、撰が一人でなされたのか、複数なのかも分かっていない。作品も未完に終わっている。収載されている説話は、先行する仏教説話集や経典、論書から素材を得ているが、単なる引き写しではなく、撰者の独創によって書き直され、新たな解釈が施されている。撰がはじまったのは、一一二〇年ころからで、その十年から二十年後には今ある形になった、といわれている。ちなみに、法然上人の生涯は一一三三年から一二二二年である。また、法然上人が『今昔物語』を読まれたという証拠はない。

『今昔物語』は、天竺（インド）篇と震旦（中国）篇、それに本朝（日本）篇の三部からなっているが、内容は、説話による一大仏教史といってもよいだろう。釈尊伝からはじまり、仏教がどのようにしてインドで生まれ、その後いかに中国で発展して日本に入ってきて、人々の心をとらえるにいたったのか、その道筋が豊富な説話の組み合わせによって綴られてゆく。世間では、『今昔物語』といえば、芥川龍之介の『羅生門』などの種本として知られることが普通で、釈尊伝をふくむ仏教史の書だと知る人は多くない。

収録する説話は千を超えるが、今回はつぎの二話を取りあげてみよう。一つは藤原保昌という貴族の郎等の話である。

*

保昌は、貴族であったが、弓矢の使い手として知られている人物であった。妻はかの有名な和泉式部らしい。丹後の守となつて任国におもむいたが、日夜狩をして暮らしていたという。この保昌の郎等で弓矢の達者な人物がいた。その郎等が狩に出る二日前の夜に夢を見た。死んだ母が、彼におよそつぎのようなことを告げたのである。「自分は悪業のた

めに今は鹿の身となって、この山に生きている。聞けば、二日後に狩があるという。多くの射手の間を逃げるのはむづかしい上に、とりわけ、お前は弓矢の道を極めていると聞く。お前の手から逃れて生き延びることは難しかろう。そこで、大きな女鹿があらわれたら、これはわが母だと思つて射てくれるな。自分で進んでお前の手にかかるから」と。

郎等は、次の日、明日の狩への参加を辞退したい、と保昌に申告したが、保昌は許さない。「今回の狩は、お前の弓の腕を見るためのもの。辞退するならお前の首をとる。絶対に参加せよ」と命じられた。

そこで郎等は、仕方なく狩に参加することにしたが、女鹿だけは絶対に射ることがないように決心した。そして当日。鹿の群れに出会った。「その中に大いなる女鹿あり。弓手にあわせて弓引きて、鎧を踏み返して、押し宛て、馬を掻き□（欠字）るほどに、この男、夢の告げみな忘れにけり」という始末。

矢は狙いたがわず、女鹿は射られた瞬間、男を「痛や」といつて見返したという。その顔は母に似ていた。郎等はたちまち馬から「躍り落ちて」、弓矢を泣く泣く投げ捨て、その場で髻を切つて法師となった。保昌はそのわけを聞いて、そういうことなら、不参を許したものを、といったが時遅く、郎等は、そののち、山寺に入つて道心堅固に行い澄ました、という（『今昔物語』 卷十九第七）。

この説話を、どのように読めばよいのか。一つは、人の決心など頼りにならないものだ、ということであろう。同時に、一度暮らしのパターンが出来上がつてしまうと、結局は、それに縛られて人は生きるものであり、そうしたパターンも、自分の選択とか決意で生み出されたというよりは、なにか宿命的というしかないような働きによって決まってしまう

ていることが多い、ということでもあろう。

大事な決心を裏切るような行為を、自らしてしまふ。そうした悲しいサガが人間にはある、ということに気づいた仏教徒たちが、のちには「宿業」という言葉を見出していった。そういう意味では、この説話は、「宿業」という言葉こそ使っていないが、人の生き方には、いわば無意識に突き動かされる一面のあることを教えている、ともいえよう。つまり、人は「宿業」から逃れることはできないのである。だからこそ、法然上人は法蔵菩薩の誓願を頼りとされたのである。

この説話で注目すべき二つ目は、この郎等が、女鹿を射た直後にとつた行動にほかならない。彼は馬から「躍り落ちて」、その場で髻を切つたという。自分で自分を裏切つたという、痛切な悲しみに襲われるなかで、彼は瞬時に発心したのである。この発心の仕方に、今の私たちは感動するのではないか。なぜなら、私たちにはそうした発心という文化が絶えて久しいから。どんな悲劇に襲われても、現代人は発心しない。もちろん例外はあるだろう。だが、私たちには、人生の不条理に直面したときに、選択するべき道が見えなくなつて久しいのではないか。

だが、この時代の人には、こうした選択への意志が実に深く生きていた。つまり、人間のサガの恐ろしさを知っていたからこそ、そこから逃れる術もまた知ろうとしていたのであろう。法然上人の求道心もまた、こうした時代のなかで養成されていったのではないか。

*

またつぎのような話がある。

インドのある国に小さな寺院があつた。そこに祀られている仏像の眉間には、高価な玉

がはめ込まれていた。その玉を見て、ひとりの貧乏人が何とかしてそれを手に入れたい、と寺に侵入する。ところが、盗もうとすると、仏像の背が伸びて、盗ることができない。そこで、男は足継ぎをして盗もうとするが、仏像はまた高くなつて、ついに盗むことができなくなつた。そこで彼は、つぎのように仏像に訴えた。

「仏が世に現れたのは、我ら衆生の苦しみを救うためでしょう。伝え聞くと、人を救うために仏は菩薩の時に、一羽の鳩を救うために命を投げ出し、飢えた母虎と七頭の子虎のために身体を投げ出し、目の悪い婆羅門のために眼を与えるなど、限らない慈悲行を実践されたではありませんか。どうして、その玉を惜しまれるのですか。私が玉を盗もうとするのも、並大抵な理由からではありません。玉を頂けないのなら、ひどい罪を犯すことになるでしょう。期待はずれです」、と泣く泣く訴えた。

すると仏像は頭を垂れて、盗人の手が届くまでになつた。盗人は、盗んでもよいということだろうと思つて、玉を取り外した。

一夜が明けて、寺の比丘たちは玉が盗まれたことに気づいて騒ぎとなる。その後しばらくしてから、盗人は玉を売りに出したが、盗品であることが分かつて逮捕され、国王の前に引き出された。盗人はありのままを話したが、国王はその話を信じない。だが、念のために使者を寺に遣わせると、仏像は頭を垂れてうなだれていた。そこで国王は盗人の話が真実であることを知つて、盗人から、玉を買い取り、もとの仏像に戻した（巻四第十七）。盗人の、いわば開き直りにも似た訴えにも応じる仏に、違和感を覚える人もいるであろう。とりわけ、道徳心の強い人は、嫌悪感を懷くかもしれない。仏のみならず、国王までもがこの盗人を許すのはどうしてなのか、と。

しかし、この説話のポイントは、貧乏のあまり盗みに手を染めようとする男が、仏が世にあらわれたのは「われら衆生を救うため」ではないのか、と訴えるところにある。その「われら」に、差別や区別があるうはずがない。盗人であろうと、善人であろうと、仏の慈悲に分け隔てがあるうはずがない。いわば、仏の慈悲の平等性を教えるのがこの説話の趣旨ではないだろうか。

そもそも、『今昔物語』はその劈頭にある説話のなかで、釈尊の出家の目的が自己一人の解脱ではなく、「一切衆生」を苦しみから解放するところにある、と明白に記している。「一切衆生」への言及こそ、『今昔物語』全編を貫く基調となっているのだ。そこでは、世間の常識が差別・区別する営みは全否定されている。

この「一切衆生」に対する「平等の慈悲」こそ、法然上人を「阿弥陀仏の本願」へ向かわしめた動機でもある。法然上人の『選択本願念仏集』には、つぎのようにのべられている。

「弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を摂せんがために、（中略）ただ称名念仏の一行を以て、その本願としたまえる」と。

盗人を捕えた国王が、彼を許すのも、仏の普く慈悲に感動したからなのであろう。（終）

..... 注解 阿満利磨

あま・としまろ

1939年生まれ。京都大学教育学部卒業後、NHK入局。社会教養部チーフ・ディレクター、明治学院大学国際学部教授を経て、明治学院大学名誉教授。同人誌「連続無窮」主宰。専門は日本精神史。『宗教は国家を超えられるか』『法然の衝撃』

『親鸞・普遍への道』『歎異抄』『親鸞からの手紙』『行動する仏教』（以上、ちくま学芸文庫）、『法然入門』『仏教と日本人』『日本人はなぜ無宗教なのか』『人はなぜ宗教を必要とするのか』（以上、ちくま新書）、『社会をつくる仏教』（人文書院）、『選択本願念仏集』（角川ソフィア文庫）など著書多数。



ちくま学芸文庫

ちくま学芸文庫
1500円＋税

新刊紹介

無量寿經

阿弥陀仏の名を称えるだけで、だれでも浄土（安楽世界）に生まれることができる——。法然や親鸞がその解釈に骨身を砕き、長く日本人に親しまれてきた浄土仏教の最重要經典。煩惱に縛られ、悪行をやめられぬまま、混迷を極めた世の中を生きるごく普通の人々。そうした凡夫を救うために四十八の誓願をたてた法蔵菩薩は、想像を絶する修行を経て阿弥陀仏となり、誓願のすべてを實現する。この阿弥陀仏の物語を、釈迦はいまだ悟りに到達できない阿難に向けて説く。全文の漢訳と読み下し、さらに懇切丁寧に施された解説により、万人のための宗教というその核心が鮮やかに立ち現れる。文庫オリジナル。

生死しやうじを受くること無量に、一切の衆生の類いは悉く曾かつて親屬た為たり。而して大悲心を起せり。

馬鳴めなう『仏所行讀』より

〔釈尊は覺りを開こうとして禪定ぜんじやうを深めると、自分自身が生まれる以前の、遙か遠い過去のことを、以前のことを思い起こし〕数え切れないほどの人生を繰り返してきたなか、〔今、〕一切の生きとし生ける者はかつての自分の親兄弟家族であり、仲間であった〔というその自覺を得るに至った。その自覺が釈尊に〕大慈悲の心をもたらしした。

未生以前の青嵐

誰がその句を詠んだのか、見た途端に知りたくなった。旅先での出会いだった。季語は「青嵐」^{あおたし}。その句を忘れないように儼に焼き付け、自宅に戻ってから山本健吉『基本季語五〇〇選』（講談社学術文庫）で調べた。あった。

なつかしや未生^{みしょう}以前の青嵐 寅彦

青嵐とは「青葉のころに、吹きわたる清爽な、やや強い風」のこと。寅彦とは戦前の物理学者、寺田寅彦のことだろうか。俳人、随筆家でもある。書架に埋もれていた昭和二十七年発行『昭和文学全集3 寺田寅彦集』（角川書店）にその句を見つけた。昭和十年七月「洪柿」に掲載された随筆の末尾を飾っていた。

随筆は、初夏の風が吹くなか、寅彦一家が東京のなかを散策する「近頃の大旅行」が話題であった。上野精養軒の藤棚の下でお昼を食べ、上野から円タクで深川の清澄公園に行き、隅田川の船や地下鉄を乗り継ぎ銀座でお茶を飲んだ。「徒歩ならゆつくり一日がかり」と綴ったところで、寅彦は結びの一文として両親から聞かされた話を「ふいと思い出した」と付け加えた。

寅彦には、自分が生まれる以前に亡くなった姉がいた。七歳で亡くなった娘のために両親は休日の度に谷中の墓参りに通っていたという。両親が当時住ん

でいた深川から谷中まで「一日がかりの墓参り」であつた、と。谷中は上野のすぐ隣。寅彦一家の「大旅行」は途中まで両親の墓参りと逆のコースをたどったことになる。青嵐に五感が研ぎ澄まされたのか、かつて聞かされた両親の話を思い出したのだろう。いや、一瞬タイムスリップして両親が墓参りに通う姿を垣間見たのかもしれない。「なつかしや」の句を添え、寅彦は随筆を結んでいる。

私がこの句に出会つたのは、平成十五年の五月十一日。その前日、私は御開帳中の信州善光寺で、大本願の御法主台下が大導師を勤める中日庭儀法要に出仕していた。法要後、一路京都へと向かった。翌日、法友工師が京都鴨川沿いのお寺に新住職として晋山するのだ。十一日の朝、私は晋山する彼の練り行列に加わっていた。行列がその寺の山門の前に差しかかると一端お練りを止めた。山門の脇に掲示板があるのに気付いた。趣のある和紙が張り付けられていて、おおらかな彼の筆遣いで青嵐の句が墨書されていた。私はしばしその句を眺めていた。

彼との出会いは大正大学の道心寮。互いに十八。当初、ほとんど接点のない二人だったが、いつしか互いに気を許せる仲となった。卒業後も連絡を取り合つては年に数回は盃を交わし、盆暮れはもちろん冠婚葬祭のお付き合ひも欠かさ

ないようになった。でも不思議なのだ。さしたる理由も、これというきっかけもないのに、さも昔からの親友のような間柄を感じていたからだ。

晋山式のあの日、「なつかしや」の句に私は仏伝の一節を思い出していた。お釈迦さまがお覺りを開かれる時のことだ。深まる禪定のなかで、自分が生まれる前、何度も繰り返されてきた自分の人生を振り返っていたお釈迦さまは、自分と一切の衆生とは、かつての家族、親類、友人というご縁で結ばれていたことを知る。そのことがお釈迦さまに誰をも救いたいという「大悲心」をもたらしたと伝えるのである。お釈迦さまは未生以前のご縁をなつかしく大切に思われ、その思いを慈しみの源泉とし御仏となられた。

私と彼もはつきり自覚はできないけれども、互いに未生以前をなつかしく感じる間柄だったのかもしれない。青嵐の句に長年の不思議が氷解する思いがした。その彼が、昨秋、極楽浄土の人となった。療養の合間に何度か食事に誘った。最後に会えたのは、去年の五月。次に会えるのは私が極楽に往生する時だ。極楽にも青嵐は吹くだろうか。もし吹いたら二人で同時に寅彦の句を詠ずるだろう。

なつかしや未生以前の青嵐

(袖山榮輝)

江戸の川を
を歩く

第三回

江戸ウォーカー

森清鑑

完成された江戸の川

江戸湾に流れ込む多くの河川を付け替え、有効活用。埋立てによって広げた土地を掘削し、堀、運河を造る。これが江戸城を中核に網の目のように広がっている。最初に掘削した道三堀、日本橋川に平川水系を繋げ外堀を掘削。そこから竜閑川、浜町川を掘削。大川（隅田川）に繋げる。日本橋川から南に、楓川、紅葉川、三十間堀を掘削。神田川、江戸川の流れを西側の外堀に。溜池に繋げ、浜御殿を囲むように汐留川として江戸湾に流す。このようにして、正に網の目のような運河が完成する。これは同時に、江戸湾、大川（隅田川）からいくらかでも荷物を運び入れられる、水の輸送路の完成を意味する。結果的に、今の銀座、築地界隈は、東洋のヴェニスと形容されるほどの水の都になる。

広大な埋め立て地、両国、深川一带には、縦に大横川、横十間川（江戸城から見て横に位置）、横に豎川、小名木川、仙台堀川、油堀、十五間川、大島川などが掘削され、壮大な碁盤状輸送路が完成する。

江戸中核部周囲の流れ

江戸中核部を囲む、水系は、ざっと以下の通り。利根川水系、荒川水系、新河岸川水系、入間川水系、石神井川水系、神田川水系、古川水系、目黒川水系、呑み川水系、多摩川水系……といった案配。

この他に、江戸には幾つもの池があり、そこから湧き出た水が川となって、田畑を潤し、主河川に注ぎ込まれている。井の頭池からの神田上水、しかり。立会川は、碑文谷池から。それだけでなく、江戸近郊各所から、湧き出た水が小川となって、網の目のように流れていた。例えば、呑み川は、桜新町辺りを水源としている。羅漢川も目黒通り清水町辺りを水源としている。こうして、今では考えられぬほど、そこ、かしこに小川が流れていたのである。

江戸の河岸

江戸の運河には、無数といって良いほどの河岸が造られていた。むしろ河岸だらけと言って良いほどである。多くは大名のための河岸であったが、江戸町民の

ための河岸もあった。日本橋川の魚河岸、外堀の鎌倉河岸、八重洲河岸など。これらは、荷物や人の集積地であり、市場も形成する。

上水、下水道の完備

大きな屋敷の周囲は、例外なく、小川で囲まれている。それらは、堀であり、下水路である。例えば、増上寺門前を囲む桜川、しかり。ここで、上水、下水道を語らねばならない。

「江戸っ子は水道の水で産湯を使い」。江戸っ子の自慢。急激に人工が膨れあがった江戸では、飲料水の確保が重要な課題であった。というのも、中核部は海の埋め立て地で、井戸を掘っても塩分混じりの水が上がってしまい、とても飲めない。そこで清冽な川の水を引いて、市中には樋（木製水道管）を埋め、市中隅々まで配った。この飲料水を上水という。長屋の井戸も上水を溜め、汲み上げたものである。貯まるまで少し時間がかかるので、この間、長屋の女将さん達が井戸の周りで世間話をする。「井戸端会議」の始まりである。

一五九〇年には、早くも、小石川上水（後の神田上水）の工事が始まる。次に多摩川羽村から上水道を引いて四谷の木戸から市中に樋を引く、玉川上水の敷設。明暦の大火後には、本所上水、青山上水、三田上水、千川上水が加わる。これらを江戸の六上水という。

上水（水道水）といっても、湧き水を引いたもの。飲料水に耐える、十分に清冽な水であった。神田上水は、井の頭池からの湧き水を引き、関口から江戸川と別れ、水戸御殿内を通り、水道橋から木樋で市中に配給。玉川上水は四谷の大木戸から地中木樋配送。一般の川と上水道の違いは、異物が混入しないように、厳格に管理されているところ。上水道の所々に高札が立ち、「水浴禁止、ごみ捨て禁止、洗濯禁止、魚鳥捕獲禁止」が告知されている。違反者には厳罰が処される。江戸郊外の住民は、近くに流れる、清らかな川の水で野菜を洗い、洗濯。化学物混入汚染がないので、きれいなもの。湧き水は飲料水。海の埋め立て地と異なり、井戸が掘れる。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月 を求めて

前田和男

第六十八回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

またまた遠のいた帰国②



明治人は楽天家であった!?

渡辺海旭は、畏友の東大教授・姉崎正治の仲介で、世界的大富豪のアルベール・カーンに援助を求めたがあえなく断われ、またまた帰国は遠のき、万事休すに立ち至った。

しかし、ここがつねに筆者を悩ませる海旭の「浮世離れ」したところだが、最悪の窮地に陥ってもさっぱり落ち込んだ気配がない。ないどころか、姉崎とは対極の盟友にして仏教改革運動の同志でもある高島米峰に手紙を書き送り、その中にこんな一節をしたためたのである。

「アブソルートに無銭だと、雲照和尚の一食の真似などは屁でもない。何でも坊主や学者は銭なしに限る」

なお、雲照和尚とは、真言宗の高僧で、俗姓を同じく渡辺といい、明治初期の廃仏毀釈

に反対して「一日一食」など戒律主義の復興を唱えて実践した点で、宗派は異なっているが、海旭には尊敬と親しみを覚える人物であった。たとえ懐ろが「火の車」であろうと、それを楽しむ心意気を雲照和尚の姿勢に託したのであろう。

それから数か月後、窮状はいや増していたと思われるのに、同じく米峰宛てに送った追伸は、こんな具合に締めくくられていた。

「少し徹夜でもして書きものをする^と直下痢というので、下痢の句を四五唸り出した。

下痢十度窓に横斜の影もなし

下痢の僧ぬつと立ちたる夜寒かな

駄哲学駄句に洒^すがむ下痢三斗

狂僧の下痢する時や雪の鐘

残雪の下痢に俗腸尚安し」

二つの書状の文面からは、大人物ならではの余裕綽々の「達観」ともとれるし、稚氣じ

みた「強がり」ともとれる。はたしてどちらなのか？ あるいは両方なのか？ なぜこんな振る舞いに及ぶのか？ 何度も同様の表現を重ねて読者諸賢にはまことに恐縮だが、やはり窮迫をめぐる海旭の振る舞いは、筆者の理解を超えている。明治・大正・昭和を代表する仏教界の傑物が、異教の地で、かくも「浮世離れ」していることをどう考えたらいいのか。

とりあえず筆者に浮かんた答えは、司馬遼太郎のいう「明治人は楽天的であった」である。

司馬の代表作『坂の上の雲』には、次の有名なくだりがある。

「楽天家たちは、そのような時代人としての体質で、前をのみ見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朶いちだの白い雲がかがやいているとすれば、それのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう」

また『翔ぶが如く』では、登場人物の村田新八にこんな評価がなされている。

「志士あがりの男に多い楽天家であった。どういいう悪い状況下でも、前途にかすかな光明を見出しては志をみずからはげましてゆく性格のもちぬしであった」

たしかに海旭には、同時代人の秋山好古・真之兄弟や正岡子規や村田新八に似た楽天的なところが間違いないとある。しかし、これをもって海旭の「浮世離れの業」の解釈とするのは、あまりにも俗にして芸がなさすぎるので、私なりにになけなしの妄想を働かせてみたい。

いったい海旭の振る舞いをどうとらえたらいいのだろうか？ そもそも、この行きづまりの局面で、海旭には他に選択肢はなかったのだろうか？ たとえば、なぜ宗門や姉崎に無心をする前に、もつとも身近なロイマン師

に支援を求めなかったのか？

そう思ったところで、私に鬱勃として妄想がわいてきた。そうか、そうだったか。どうやら答えは海旭ではなくロイマン先生にあったのかもしれない。「犯人」は身近なところにいる。これは、古来、探偵小説の常道ではないか、と。

インド学の二大巨星、墜つ

海旭にとって十年以上にわたる恩師のエルンスト・ロイマン博士を「犯人」よばわりするとは何事かと、読者からお叱りをうけそうである。ロイマン師は夫人ともども、海旭にドイツで学究をきわめさせ、一日も早く故国・日本へ錦を飾らせてやりたいと、陰に日向に物心両面で海旭を励ましつづけている最大の恩人ではないかと。

おっしゃるとおりで、事実、私もロイマン夫妻の振る舞いをそのように記してきた。しかし、それは海旭が篤志家のアルベール・カー

ンに支援を断られる前までのことであつた。その後に、ロイマンの内面である逆転が起き、それが海旭の「万事休す状態」にも逆転をもたらしたのではないか。そんな妄想が私の内面にわいてきたのである。それを示す直接的物証はない。海旭の日記、手紙、またロイマンの書簡にもそれは残されていない。しかし、傍証（とおぼしきもの）を総動員しつつ、わが妄想のなせる謎解きを以下に開陳するので、しばしお付き合いをねがいたい。

ロイマンと海旭の關係に逆転をもたらした契機のひとつはヨーロッパ印度学の活況である。それは、欧米各国の探検隊が中央アジアで貴重な仏教經典の断片を発見して母国へ持ち帰ったことによるものだった。

海旭がストラスブルクへ留学した一九〇〇年（明治三十三年）はその先駆けとなった年であつた。ロシアが領土的野心を背景に中央アジアへ學術調査隊を派遣、それに触発されてイギリス、フランス、ドイツ、そして日本

も次々と探検隊を送り出す。なかでも、オーレル・スタイン率いるイギリス隊が3回におよぶトルキスタンの探検調査で敦煌の仏画・仏典・古文書類を発見して持ち帰ったことはあまりにも有名だが、成果という点では、ドイツも負けてはいなかった。海旭のドイツ滞在中に、グリュンヴェーデル隊長とル・コック隊長の下、主にトルファンで三回の探検が挙行された。

その歴史的・学術的凱歌について、海旭は、「スタインを凌駕するもの

として、故国へこう書き送っている。

「有為な学者を派遣し、スタイン氏の功績に譲らぬ成熟をなした。否写経類でははるかにスタイン氏を凌駕する立派な取得があった。古美術品も非常に立派なものがある」(『壺月全集』上、四五五頁)

もうひとつロイマンと海旭の関係に逆転を

もたらした契機は、そうした探検隊によるヨーロッパの印度学の活況がまさに始まらんとするときに、それまでヨーロッパ印度学アカデミアにながらく君臨してきた二巨星がにわかに没してしまったことである。それは当然のことながら、ロイマンの(ひいては愛弟子である海旭の)アカデミアにおける位置にも変化をもたらすことになる。

その二人とは、リヒャルト・ピツシエルとヴィゴー・ファウスベルである。

リヒャルト・ピツシエルは、ベルリン大学教授でプロシア王国学士院会員、古代インドの俗語プラークリットの世界権威であった。インドのマドラスに滞在中に風土病を得て急逝、海旭はロイマン宅で友人二人とチェスに興じていたときに悲報に接した。ロイマンともどもピツシエルのインドでの活躍に大いに期待していただけに、海旭は大いに衝撃を受け、追悼文を『東洋哲学』に寄せると、古代インドの大叙事詩リグ・ヴェーダの神々

はなぜ彼を守護できなかったのかと嘆いてみせた。

「獠猛なる風土病の棘手は、今やまた其毒爪を磨き、利牙を鳴らして、この老碩学をして、不帰の客たらしめしにあらざるなきを得むや。聞け。梨俱（リグ・ヴェーダのこと）の諸神、大史詩の仙群。爾等は、爾が栄光を讃じ爾が祖国の古文化を嘆ぜるこの老碩学を、何すれぞ爾が聖域の中に、守護する能はざりしか。（『壺月全集』下、三九二頁）

もう一人、時期を同じくして没したのは、ヴィゴ・ファウスベルである。デンマークはコペンハーゲン大学のバリー学の泰斗であった。

二か月後に控えるコペンハーゲンでの「第十五回東洋学会」では、このファウスベルに対して長年の榮譽が称えられることになっており、そこでは海旭も解説を手伝った、新疆

地域の古国・于闐から出土した古文書についてロイマン教授が発表することにもなっていた。それだけに、海旭には、哀感もまたひとしおで、再び追悼文を『東洋哲学』に寄せると、その末尾に次の詩を捧げたのだった。

「北海洪濤、雲烟万里、雄景空しく存して、講閣人空し、悲しい哉。白百合や過ぎにし夢に月宮をかいまみしことありきとおもふ」

（『壺月全集』下、三九二頁）

恩師ロイマン、変心す？

二大巨星が相次いで墜ちたことは、ヨーロッパ（ということは当時においては世界における）インド学、比較宗教学の大いなる痛手であったが、皮肉なことにロイマンにとって一面では「朗報」であった。

ロイマンがアカデミアに占めていた地位が相対的に上がったからである。それはロイマンのもとに学問的な果実がより多くもたらさ

れることになり、それはいつそうロイマンの学問的地位を高めることとなった。

ドイツ探検隊がもたらした出土品はベルリン大学教授リヒャルト・ピツシエルを中心として解説されはじめていたが、ピツシエルの急逝によって、その作業はベルリン大学からストラスブルクのロイマンのもとへと移されることになった。それはロイマンのさらなる「学問的野心」をかきたてることにもなった。

ロイマンは、中央アジア研究の二大巨頭であるロシアのオルデンブルクとイギリスのヘルンレへ書状をしたため、それぞれ当地で探検隊によってもたらされたままにまだ特定に至っていない「出土品をストラスブルク大学に集めて、一括管理のもとで同定・比定の作業を行なったらどうかと提案。すると、即座に快諾の返事があり、十数日後にはロシアはサンクトペテルブルク大学、イギリスは大英博物館とオックスフォード大学などから送られてきた珍奇至宝の古写本断片で、ロイマ

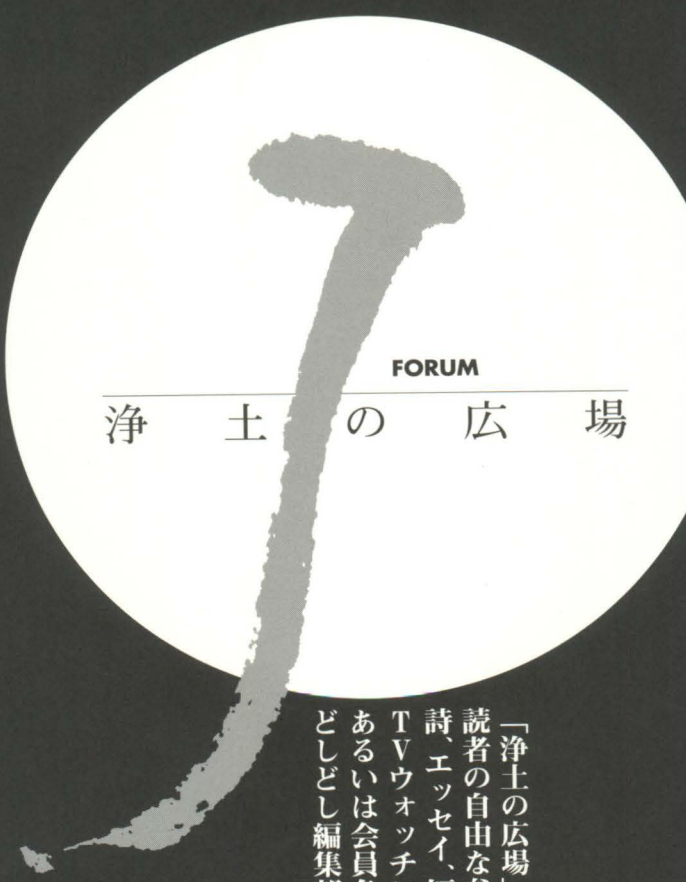
ンの研究室は足の踏み場もない状態になった。こうなると、もはやロイマン一人では手に負えるはずもない。ここでロイマンの心中にジレンマと変化が生じたとしても不思議ではない。

二年ほど前には、海旭の留学延長を願い出る後楯として、「博士号を取得させたら必ずや帰国させるから、今しばらくの猶予をいただきたい」と宗門に請け合った。しかし、今回は「この学問的好機をとらえて成果を上げるには、どうしても海旭の力が必要なので、今しばらくの猶予をいただきたい」と願い出なければならぬ立場に逆転してしまったのである。

いささか長くなったが、以上が、ロイマン教授と渡辺海旭との関係の劇的变化にまつわる筆者の妄想的憶測である。

さて、この妄想的憶測が正しいとすると、おそらく二人の間にはこんな会話がかわされたのではないだろうか。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●へそ

〔特選〕金剛力士の臍に溜まりし春埃

堀江 善久

手に金剛杵か金剛杖を持っているのが、この菩薩だとある。念怒の相がいかにめしいのだが、臍に注目し、そこに埃が溜まっているとなると、急にほほえましくなる。俳諧に欠かせぬ滑稽の妙をここに見る。

〔佳作〕銘パンに浅きへそあり春の昼

笠井 亜子

へその緒はどれもよく似て縁うらら

石原 新

夏衣臍ちらつかせ少女行く

浜口 佳春

●対話

〔特選〕仏壇と対話する祖母日永し

小林 苑を

仏壇を仰ぐと祖母の夫、祖父の位牌が立っている。祖母は夫に話しかけるように、その位牌に対してするのである。その時祖母の脳

裡には、生きている時の夫の姿が、まざまざと浮かんでいるのだ。

〔佳作〕対話なき夫婦と猫とフリージア

入谷友里江

苗代を跨ぎ親子の対話かな

井村 善也

片陰に入りて対話の続きけり

池田 伊吹

●自由題

〔特選〕もうそこに米寿来ており花の宴

東

保

花見の宴に居る。毎年一度はこうして花の下に居るのだが、考えてみれば年をとったもので、米寿の宴を開く時がもうそこまで来ているのだ。いろいろのことがあったものである。まだまだ長生きせねばなるまい。

〔佳作〕みなさんに少し遅れて仏の座

三枝亜希子

人形を乗せて朧の乳母車

長谷川 裕

辛口の酒を選んで桜の夜

増田 信子



日常 捨て身 自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■へそ

若者の臍出しルツク夏は来ぬ
 臍の緒は桐箱にあり春埃
 かたくなな性格なつみかんに臍
 重力の臍あんぱんに臍あり
 臍夜のへそからなにか聞こえる
 華臍魚の腹たぶたと吊られけり
 またの名を春愁という臍のごま
 空に臍あるがごとくに初雲雀
 寄せ植えに臍あり雛菊の主張
 天空の臍に桜の木が触れる

池田伊吹
 内藤隼人
 小林苑を
 村松芳郎
 月島恭子
 斉田 仁
 長瀬愛理
 横山美美子
 相川 保
 住谷 蒼

■対話

三月の対話がうまくいかぬチエロ
 白梅と対話するまでもうすこし
 草餅と対話しておる桜餅
 対話してなお啓蟄の孤独かな
 プラトンの対話の隅の果箱かな
 潮まねき潮まねきとは対話せず
 風船と風船対話しつつ消ゆ
 対話する石の地蔵とかざぐるま
 菜の花の無数の対話筑後川

■自由題

春日さす半座を分けてバスを待つ
 まじりあう花と遊びし春の草
 ボール追う犬の跳躍花曇り
 春空の部品のような松の枝
 厚切りのトンカツ春の切断面
 駅前のパンジーよりもよくしゃべる
 三月の街より古き桜の木
 スカートがふんわり浮いて春二番
 春寒やどでかい魚肉ソーセージ
 三月の小部屋の多きお弁当
 どの松も盆栽めいて春の月
 風船の尻に糸あるまま消える

井口 栗
 工藤 掉
 勿来聡一
 月島恭子
 遠田奈美
 笠井亜子
 松野浩一
 内田美智
 斎藤裕二

真野 龍
 浜口千賀子
 石原 新
 勿来聡一
 工藤 掉
 野村明秀
 袖岡 篠
 和田江梨子
 一谷真紀子
 丹羽奈都
 飯塚俊樹
 友谷理沙

締切・二〇一六年五月十日
 発表・『浄土』二〇一六年六月号
 選者・増田河郎子（『南風』主宰）
 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねネッ

かまちろう



編集後記

新緑を見つめて力もらいたい 岱潤

人の信用というものは、やはり肩書き、学歴、年齢、血筋というものが強く影響するのでしょうか。東大を出、八十歳を超し、本山の法主を務め、ましてや親鸞聖人の末裔だと言え、信用できる人とも誰が思うことでしょう。その著書に対して学者でもないただの編集者が批判をしたところで、した人間が馬鹿にされるだけだということは、先刻承知の上で申し上げたい。

昨年暮れに発行され、かなり売れている『人間は死んでもまた生き続ける』という大谷暢順師の本には失望以外何もあ

りませんでした。「死んでも生き続ける」というタイトルに感激して、極楽浄土の話と思い込み読んでみしたら驚きで、人は死後、その人の行いで六道輪廻すると書かれていました。確かに未だ施本やチラシなどでは、「仏教には六道輪廻という教えがあります」などと書かれた物が出回っているのが実情ですが、六道輪廻は釈尊以前のインドの教えで、釈尊はそれを超えることを目標としました。死後の世界に六道輪廻を認めることは、釈尊が説いた仏教の救いを否定することであり、極楽浄土への往生を説いた浄土教を完全否定することです。出版表現の自由があり、何を書いても許されるわけです

が、間違っているものには、それがどんなに偉い方が書いたものであれ、間違っていると主張することは必要なことではないでしょうか。私たちにとって大事な教えであるのですから。(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土 八十二巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十八年四月二十日

発行 平成二十八年五月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了昭

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(日黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
肱博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※ 寺院名 () を入れる・入れない

※ 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※ 写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。

※ 消費税と発送料は価額に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。

※ ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。

※ 1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、ご注文をご記入して、法然上人鑽仰会へ

Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
ご郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがいい。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※ お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。